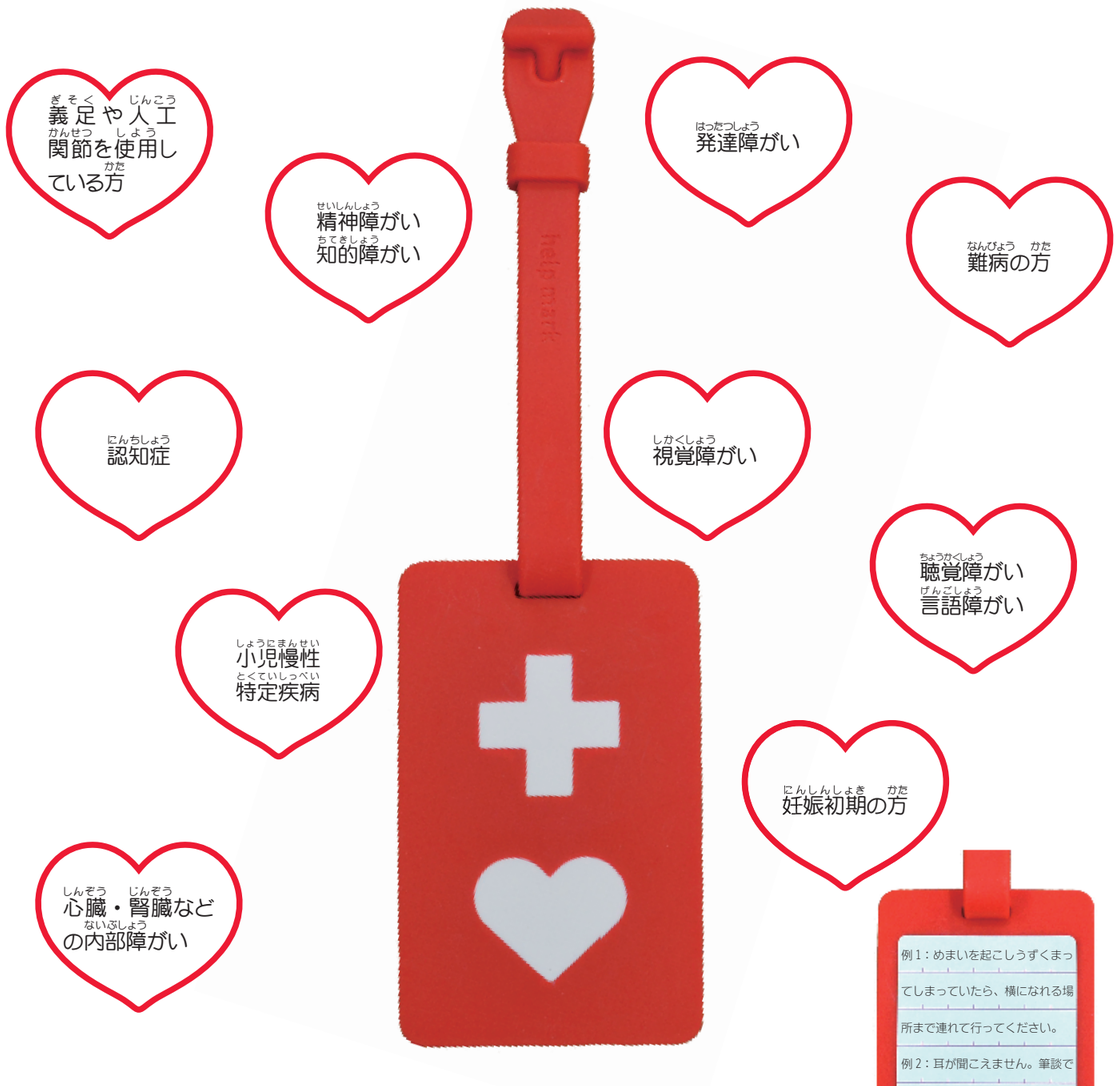
「思いやりおせっかい」から始めよう
～ 人がつながるまちへ ～

たすけあいのしるし ヘルプマークを知っていますか?

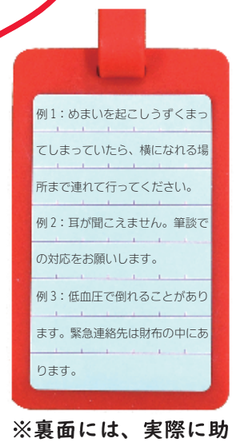
障がいや疾患などがあることが外見からはわからない方が、支援や配慮を必要としていることを周囲に知らせることができるマークです。



ヘルプマークを見かけたら、**「思いやりおせっかい」** をお願いします。

思いやり … 見守りが安心に。常に声掛け（支援）が必要な訳ではありません。
おせっかい … 状況に応じた声掛け（支援）をお願いします。

ヘルプマークの現状
都道府県導入状況…45 都道府県（令和２年 10 月時点）
本市の配付状況…627 枚（平成29年10月～令和２年12月）



※裏面には、実際に助けて欲しいことなどを書くことができます

電車やバスでは

混雑状況などに応じ、席を譲るなどの配慮をお願いします。疲れやすかったり、同じ姿勢を保つことが難しい人がいます。

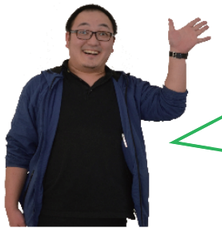
駅やスーパーなどでは

困っている様子があれば「どうかしましたか」など温かいお声掛けをお願いします。突発的な出来事への臨機応変な対応や、立ち上がる、歩くなどの動作が難しい方がいます。

災害時には

安全に避難するための声掛けや誘導の支援をお願いします。状況把握が難しい方、自力での迅速な避難が難しい方がいます。

ヘルプマークを利用している方の声を紹介します



自立支援協議会地域共生部会
髙橋　惇さん
（市社会福祉協議会障がい者相談支援センター相談支援専門員）

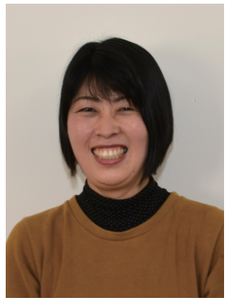
○目につきやすいシンプルなデザインなので、付けているだけで「なにかあるのかな？」という気付きは得られやすい。
○ヘルプマークを知らない人たちがまだまだ多いと思う。もっとみんなに知って欲しい。
○子どもや教員、保護者などの教育現場や普段利用する店舗などの人たちにもっと知ってもらいたい。
○付けていることで、知らない人から優しくされることがあった。人と人との関わりがちゃんとあると思えてうれしかった。
○十分に周知が進めば、外見では病気や障がいがあることがわからない人にとって、ヘルプマークはとても心強いものだと思う。

私たちはすべての人が「この地域で生きる（暮らす）を支援する」ことを目標に、医療、福祉、介護、児童、教育分野などの関係者が集い、誰もが途切れることなく支援を受けられるような、人でつながる仕組みの構築を目指して活動しています。

さて、暮らしの中にはさまざまなマークがあります。それらのマークは、社会の中で一人ひとりが互いを尊重しあいながら共に生きていくために作られたものですが、私たちはそれらのマークを十分に活用できているのでしょうか。

マークは、発信側と受信側の双方がその意味・役割を知り、初めて効力を発揮します。マークの中には、外見では分からない障がい（困りごと）への支援を必要としている方のものもあり、知らないことにより、困っている方が誤解や不利益を受けたり、我慢を強いられたりする可能性も生じます。

マークの意味や役割の理解が進めば、普段でも災害時などにおいても、「思いやりおせっかい」を促す原動力になり、その優しさの積み重ねが人を笑顔に、人と人がつながる住みやすい共生社会を作ることになると思います。



自立支援協議会地域共生部会
部会長　藤原夕紀さん
（豊岡台病院　精神保健福祉士）

ヘルプマークは下記の場所で配布しています
生活福祉課・川之江窓口センター・土居窓口センター・新宮窓口センター

問い合わせ先
生活福祉課　28-6023